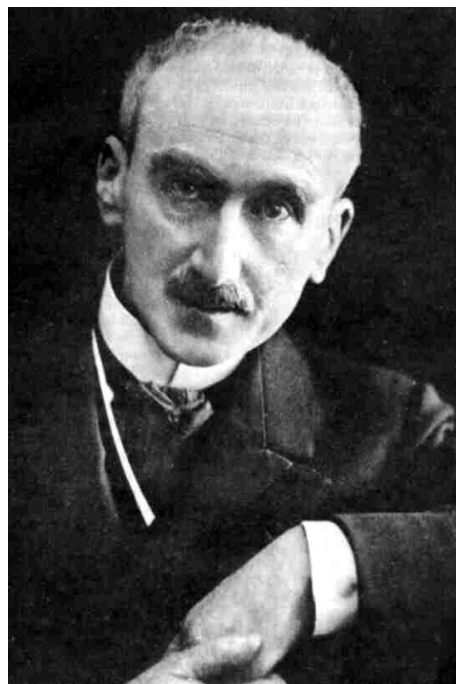


ベルグソンと小林秀雄



Henri Bergson

(http://commons.wikimedia.org/wiki/Image:Henri_Bergson.jpg)

jscripiter

Foreword

「モオツァルト」以後の考えを進めるために、ベルグソンと小林秀雄に関するこれまでの思索をまとめておこうと思った。フーコーの「言葉と物」を廻る思索の経過の中で、ポストモダンとは哲学などの人文諸科学と近代科学の統合の過程の苦闘なのかもしれないと考え始めた。しかし、人文諸科学は構造主義によって精密な数学を基礎とする物理学などを模倣しはじめようとしたのかもしれないのだが、基礎となる数学でさえ、ゲーデルの不確定性原理によって、世界を理解するための道具立てとしては不十分なものとして見えるようになった。世界を理解する、それは見果てぬ夢なのではないのだろうか。「論理と不確定性の統合はまだ先が見えない。」すべては不確定性の霧の中に止まっているように見える。

しかしながら、新しい試みが始まっているようなのである。「ソフトウェア工学と社会学は似ている」というような言説を見て、逆流が始まっているのではとも思う。新たな領域に身を晒す前に頭の整理をしておこう。

2/10/2007 (Sat.)

[\[脳科学\]](#) 真の記憶は脳の機能ではない

アンリ・ベルクソン著、合田正人・松本力訳、「物質と記憶」、ちくま学芸文庫 へ-5-2、2007年2月10日第1刷、430ページ、1300円。昨日、新大阪駅の dan で購入。



アンリ・ベルクソン「物質と記憶」

バートランド・ラッセル著、市井三郎訳、「西洋哲学史 3 - 古代より現代に至る政治的・社会的諸条件との関連における哲学史 3 近代哲学」、みすず書房、1970年3月30日第1刷(1976年12月15日第8刷)、517-821ページ、2000円、より引用。

・・・彼はその種の事実から、真の記憶は脳の機能ではない、という結論が出てくると主張する。過去は物質によって働らきかけ(・・・・)られ、心によって想像される(・・・・)に 違いはないという。記憶は物質から発散されるものではなくて、もしわれわれが物質というものの意味を、具体的な知覚において把握されるままのもの——常に ある種の持続を占めるもの——にとれば、まさにその逆の考え方がより真相に近いであろう、と彼はいう。(789ページ、第二十八章ベルグソン)



バートランド・ラッセル「西洋哲学史 3 - 近代哲学」

更新: 2007-02-10T23:50:37+09:00

2/11/2007 (Sun.)

[\[茂木健一郎\]](#) 新「学問のすすめ」

[茂木健一郎](#) [クオリア日記: 新「学問のすすめ」](#) ネタ。本文が全部読めないのが残念。

今の時代、まさに、「学問のすすめ」が求められていると思う。以前から何回か取り上げてきたが、NHKの[課外授業～ようこそ先輩～](#)は大変興味深い「学問のすすめ」の試みではとってきた。

- 更新日記記事の「課外授業」検索結果
 - [\[本\]「虫をめぐるデジタルな冒険」、「こまった人」、「無の科学」](#) (2005/11/20)
 - [\[日記\]仏文学者 奥本大三郎 - 課外授業 ようこそ先輩](#) (2005/11/20)
 - [\[日記\]CP-600のリバイバル](#) (2005/11/20)
 - [\[TV\]デジカメでTV画面を切り取る](#) (2006/01/15)
 - [\[日記\]課外授業 ようこそ先輩 - 広瀬幸雄](#) (2006/05/28)
 - [\[養老孟司\]まともバカ](#) (2006/10/09)

先日の立花隆の「ぼくの血となり肉となった五〇〇冊・・・」のような本も形を変えた「学問のすすめ」である。この本に、立花隆が最初に読んだ本格的な哲学史が、バートランド・ラッセルの「西洋哲学史」(みすず書房、1970年)だという話が、98-99ページに出ている。99ページの表紙写真と僕が持っている本の表紙の違いは1刷と6刷(1976年)の違いなのだろう。全三冊を本棚から引っ張り出して眺めていたのだが、「物質と記憶」がベルグソンの章を読ませてくれたのが昨日のことである。

インターネットを「学問のすすめ」として読むとどうなるのかというのはおもしろい試みとなるかもしれない。MITのOpenCourseWareの試みや慶応大学SFCのグローバルキャンパスなども素晴らしい試みだろう。僕には、Wikipediaが「学問のすすめ」のようにも読める。最近、Wikipediaと

Wikipedia からリンクされているページについての検索エンジンがサービスされているという話を讀んだが、的を得た試みのよう に思った。

- 更新日記記事の「OpenCourseWare|慶應」検索結果
 - [\[Computing\]MIT OpenCourseWare](#) (2004/02/07)
 - [\[A.I.\]General conditions for predictivity in learning theory](#) (2004/04/04)
 - [\[日記\]慶應大学SFC グローバルキャンパス](#) (2004/12/19)
 - [\[日記\]デジタルアース](#) (2005/01/24)
 - [\[日記\]日本版 OpenCourseWare](#) (2005/05/14)
 - [\[日記\]進歩しているかい](#) (2005/06/19)
 - [\[Media\]Kung Pow - Matrix Cow Combat - Google Video Popular](#) (2006/03/21)
 - [\[PlayStation\]PS3 プログラミングへようこそ](#) (2007/01/17)

その他、[NHK オンライン|ドキュメンタリー/教養](#)へのリンクを取り敢えず残しておこう。

情報量が多いために限られた時間をどう使うかということが問題になる。どの本を読むのか、テレビやラジオのどの番組を視聴するのか。それは個人のおもむくままということになるのだろう。自分の心の声に耳を澄ませ。見逃したり、聞き逃したり、読み逃すことがないように、ガイドを作れ。と、自分に言い聞かせている。

更新: 2007-02-11T11:57:45+09:00

[\[立花 隆\]](#) 記憶の外部化、神経接続、サイボーグ

[立花隆×押井守 NHK「プレミアム10」内対談：INNOCENCEに見る近未来科学：SCI\(サイ\)。イノセンスは攻殻機動隊の続編というが、攻殻機動隊2 MANMACHINE INTERFACE とは異なる。](#)

立花隆が「立花ゼミ」を再開させているのを知って(五〇〇冊本に書いてあったかな、・・・違うみたい・・・)、見に行ってみつけたページ。一部しか 放映されなかった対談の内容をすべて書き起こして公開している。少しいろいろ勉強したせいか、このような話についていけるようになった。僕がここ数年調べ たような話は、すでに知識・認識として共有されつつあるという感が深い。

人間の行動はほとんど無意識的・自動的・機械的であり、時折、意識的に方向性を選択する。その選択は記憶に基づいて行われる。感覚的にか、論理的にか、多少の違いはあるにせよ、臨機応変に行われる。押井氏が「コンピュータが人間にどこまで近づけるかよりも、人間はどこまでコンピュータ的か、機械的か ということを明らかにすることのほうがおもしろいのではないか」というようなことを言っている。ゴースト・イン・ザ・シェルはゴーストとは無意識のことになるのかな・・・意識よりも無意識の中味が問題になる。しかし、機械はゴーストを持つかということと違うだろうと・・・無意識のと機械的を括ってしまうとおかしいことになる・・・ラッセルによれば、ベルグソンは次のように考えたらしい。

・・・頭脳の機能は、われわれの心的生活を実際的に有用なものにかぎることであり、頭脳がなければ、あらゆることが知覚されると考えられるのだが、現実にはわれわれは、自

分たちの関心を魅(ひ)くものしか知覚しないという。「肉体はつねに行動の方向に向けられ、行動ということにかんがみて、精神生活を制限することをその本質的な機能としている。」実際のところ頭脳は、選択の道具なのだという。(「西洋哲学史 3」、みすず書房、789 ページ)

人間の無意識的・自動的行動について考えたのが、マービン・ミンスキーの「情動機械」なのかもしれない。無意識と意識は切り離せないから、言葉として対立軸にあるように見えても、意識は無意識に属していると考えられるだろう。情動こそが、無意識からの意識の発現を促すという意味で、人間は情動機械なのかもしれない。

記憶の外部化という意味は、最初、単に知識を文字で外部に定着するというように簡単に考えたのだが、もっと意味が深そうだと考え始めた。よく考えると、脳は身体を含めた外部世界のモデル(モデルという言葉が適切かどうかは疑問だが)を自己組織的にダイナミックに生み出し、外部世界と身体や道具を通じて相互作用できる。脳の部位と体性感覚野の地図(池谷裕二著「進化しすぎた脳」、47 ページ、図 12)のように、身体は脳に展開されている。身体から離れた外部世界はおそらく知覚を通じて取り込まれた情報を元にして同様にモデル化されているはずだが、どのようになっているのだろうか。地理的情報、時間軸(歴史的)情報、個々の事象の知識などをどのように整理しているのか。そして、記憶の外部化においては、そのようなモデルの外部化ということが考えられるかもしれない。単に文字による記憶の定着ではなくて、もっとダイナミックなことが起きる。

池谷裕二著「進化しすぎた脳」、講談社、ブルーバックス B1538、2007 年 1 月 31 日第 2 刷(2007 年 1 月 20 日第 1 刷)、397 ページ、1000 円は大変刺激的な本である。帯にも「しびれるくらいに面白い!」と書いてある。朝日出版社から出た初刊本(2004 年 10 月 25 日)に最新の追加講義を加えてブルーバックス版として出版された。4-17 に『人間は「体」でなく「環境」を進化させている』という項があり、「従来は、環境が変化したら、環境に合わせて動物自体が変わってきた。でも、いまの人間は遺伝子的な進化を止めて、逆に環境を支配して、それを自分に合わせて変えている。」とある(313 ページ)。また、4-18 では「改造人間」というタイトルだが、サイボーグではなくて、「デザイナー・ベイビー」の問題を取り上げていて、人間の欲望が進化の法則になろうとしていることに目を向けている(315 ページ)。



池谷裕二著「進化しすぎた脳」

[池谷裕二のホームページ](#)

- 更新日記記事の「池谷裕二」検索結果
 - [\[日記\] 徒然なるままに - 本屋にて](#) (2005/07/31)
 - [\[本\] 「精神と物質」以後](#) (2006/04/05)
 - [\[脳科学\] 池谷裕二](#) (2006/09/05)

記憶の外部化というのは、知識の文字定着化でもあるし、養老先生の言われる脳化社会でもあるだろう。サイボーグもいわば身体の記憶の外部化であるのかもしれない。

- 更新日記記事の「サイボーグ」検索結果
 - [\[Computing\]サイボーグPC](#) (2004/05/22)
 - [\[SF\]ダニールとの賭け](#) (2005/07/08)
 - [\[iPod\]iPodのマトリックスな世界](#) (2005/08/02)
 - [\[立花 隆\]人はどこへいくのか](#) (2005/11/05)
 - [\[千夜千冊\]サイボーグ宣言](#) (2006/09/30)

[SCI\(サイ\) - サイエンスの、最先端を。](#)のページには、[RNA研究の最前線：SCI\(サイ\)](#)、[日本の、これから一ネット社会](#) 関連リンク集+“大討論”掲示板：[SCI\(サイ\)](#)、[NHK スペシャル補遺：SCI\(サイ\)](#)などがある。今後の活動に注目している。

- [立花隆 - Wikipedia](#)

更新：2007-02-12T13:12:31+09:00

[2/12/2007 \(Mon.\)](#)

[\[哲学\]](#) 真の記憶は脳の機能ではない II

本日記では、思考の断片をほとんどそのまま書き残している。自分がどのように考えたのかというような内容は大概書きにくく、考えもまとまらないから、単にリンクや引用などを残すことが多くなる。何か考えを書き付ける場合もたどたどしい、脈絡のある一貫性を持つ思考からは程遠いものでしかない、プログラムであれば、動作もしないα版以前のままかもしれない。しかし、知識循環・発想定着型データベース足らんと欲すれば、それも仕方がない。書くことは考えることであり、そこが出発点である。少しでも螺旋階段を上らねばならぬ。逆に降りている場合もあるかもしれないが^^;ということで、繰り返し書く場合には少しはいろいろ考えたということになる。

ベルグソンの「真の記憶は脳の機能ではない」はなかなか了解しにくい考え方のような気がする。訳者の合田氏のあとがきには、分子生物学者のジャン=ピエール・シャンジューの次のような言葉が引用されているぐらいである。

・・・「ベルクソンは、「記憶は原理的に物質から絶対的に独立した力能でなければならない」、そして「純粹記憶を脳のある働きから生じさせようとするあらゆる試みは、分析に対して根本的な錯誤をさらけ出すはずである」と断言していました。この点に関しては、偉大な哲学者の直観は間違っていたことが判明しています」・・・(「物質と記憶」、ちくま学芸文庫、414ページ)

しかし、その結論を安易に受け入れる前に、少しずつベルクソンの考えを追っていこう。

・・・知覚をどれほど短時間のものと想定したとしても、実際、知覚はつねにある程度の持続を占めており、したがって、多数の諸瞬間をして互いに継続させる記憶の努力を必要としている。われわれが明らかにしようと試みるように、感覚性質の「主観性」(subjectivé)はまさに、われわれの記憶によって行われる現実的なものの一種の凝縮(contraction)のうちにとりわけ存している。要するに記憶は、直接的な知覚の土台を想起のテーブルクロスで覆い尽くすもの、そしてまた多数の諸瞬間を凝縮させるものとい

う二つの形で、知覚における個体的意識の主要な提供物、諸事物についてのわれわれの認識の主観的な側面を構成する。（「物質と記憶」、ちくま学芸文庫、33 ページ）

2/18/2007 (Sun.)

[本] 「意思」の生み出す時間

画期的論考と思った。あっという間に読み終えた。人間的(主観的)時間、物理学的(客観的)時間、配列的時間から説き起こして、過去と未来は生命の「意思」によって生じることを示す。

人間の感じることのできる時間は現在だけである。過去を懐かしんで、昔住んでいた場所を訪れても現在があるだけであることに途惑う。過去を見出すことはできない。過去は「意思」が生み出した記憶や記録によって参照できるだけだ。未来は記憶や記録にはないので当然知ることはできない。未来は「意思」を持つ人間が参画して創造する。



「時間はどこで生まれるのか」(2006年、集英社新書)

著者：橋本淳一郎
題名：時間はどこで生まれるのか
発行：集英社
新書・文庫：集英社新書
新書・文庫番号：0373G
発行日：2007年1月24日
刷数：2
初版データ：2006年12月19日第1刷
ページ数：188
価格：660円

時間というのはマクロな世界の現象であるということになるのだが、いまさらのように不思議な気持ちが出てきた。なぜ生物は生まれ、進化してきたのか、それはマクロな世界のエントロピー増大の法則に抗して、秩序を生み出すメカニズムなのか。生命の進化が時間を生み出したのか。結局、時間の神秘は生命の神秘に行き着くという結論かな・・・科学的に言えば、進化論に行き着くと言うべきかもしれない。そして、物質と記憶の問題に行き着く。世界存在の不思議さを再認識させてくれた。

本書は、読みやすいだけでなく、付録・註・あとがきだけで50ページあり、同様にわかりやすく充実していて、理解を助けている。付録でベルクソンの「創造的進化」に言及しているのが印象に残った。次のように結論が大いに類似しているからであろう。

・・・将来が現在のかたわらに与えられるのではなく、現在にひきつづいておこるように定められているのは、将来が、現在の瞬間においてまったく決定されていないからである。また、かかる継起によって占められる時間が、一つの数とは別ものであり、そこに住む意識にとって、絶対的価値と絶対的実在性をもっているのは、もちろん一杯の砂糖水のような人為的に孤立させられたこれこれの系においてではなく、この系を部分として含む具体的全体において、たえず時間が、予見されないもの、新たなものをみずから創造しているからである。かかる持続は、物質そのものの事実ではありえない。むしろそれは、物質の経過を逆にさかのぼる「生命」の持続である。この二つの運動は、それにもかかわらず、やはり相互に連帯をたもっている。したがって、宇宙の持続は、そこにおこなわれる創造の範囲と、一つのものでしかないはずである。(世界の大思想 II-11 ベルグソン 時間と自由[中村雄二郎訳] 創造的進化[松浪信三郎・高橋允昭訳]、河出書房、昭和46年(1971年)11月30日再版所収、「創造的進化」にある「時間に関する二つの観点」、370ページ)



「世界の大思想 II-11 ベルグソン」(1971年、河出書房)

更新: 2007-02-18T16:16:36+09:00

[\[ミシェル・フーコー\]](#) 言葉と物 VIII - ベルグソン

「時間はどこで生まれるのか」と「物質と記憶」を早くも読了。めずらしいスピードだ。同時に読んだ本が、偶然にベルクソンに結びついた。ミシェル・フーコーがベルクソンをどのように見ているのか、「言葉と物」を調べてみた。

ベルクソンは「機械的唯物論に反対して生命の内的自発性を強調した」と固有名詞索引にある。「言葉と物」には、見開き左ページの下欄左に原註と一緒に訳註が、巻末に固有名詞索引と事項索引

が備えられており、様々な観点から内容を調べられるようになっている。186 と 265 ページにベルグソンが現れる。

・・・十九世紀全般にわたり、カントからディルタイおよびベルグソンにいたるまで、批判的思考と生命の哲学とは、たがいに相手の主張をとりあげてはこれに異議を唱えるという、そうした関係におかれることとなろう。(第五章 分類すること、186 ページ)

・・・客体の側にある「根底」あるいは「先験的なもの」に関する形而上学は、実証的認識(とりわけ生物学、経済学、文献学のもたらす)の財宝を奪おうとし、逆に実証主義は、認識しえぬ根底と認識しうるものの合理性との分割のうちに、みずからを正当化する根拠を見いだすのだ。批判哲学=実証主義=客体 の形而上学という三角形は、十九世紀初頭からベルグソンにいたる、ヨーロッパの思考の基本的構成要素なのである。

このような組織を可能にした考古学的条件は、表象の純然たる内部分析によっては理解できぬ経験的な場の出現と結びついている。それゆえ、この組織との関係において、近代の《エピステーメー》に固有なくつかの配置が出現するわけだ。(第七章 表象の限界、265 ページ)

前の記事で見たように、ベルクソンは「物質と記憶」において「われわれは、どうして記憶が物質のなかに宿ることになるのかはわからない」と告白しているのであって、これは結局、実証主義において様々な文献を調べながらもわからないことはわからないということである。21 世紀の現在でも記憶がどのようになされているのかは明確にはわかっていないわけで、当然のことだろう。フーコーは「言葉と物」において、事項索引を見る限りは「記憶」には言及していない。

[哲学] 真の記憶は脳の機能ではない III - 物質と精神の間

Bergson はベルクソンと読むのがフランス語としては正しいだろうが、ベルグソンと書いてある場合も多い。本日記では統一せずに出典に応じて使い分けている。ラッセルの言う「真の記憶は脳の機能ではない」という文をベルクソンの「物質と記憶」の文脈から引き離して単純に解釈するのは危険なので、もう少し読み込んでみた。ベルクソンの思考は科学者のようで現在でも新鮮である。

二元論者と言われるベルクソンが脳と記憶についてどのように考えていたか、二箇所引用してみよう。

・・・脳は有用な想起を引き起こすことに貢献しているが、更にそのうえ、それ以外の想起すべてを一時的に斥けることにも貢献している。われわれは、 どうして記憶が物質のなかに宿ることになるのかはわからない。・・・(「物質と記憶」2007 年、ちくま学芸文庫、第三章 イマージュの残存について、252 ページ)

・・・物質の過去はまさにその現在のなかで与えられているのだ。しかし、多少とも自由に進展する存在は各瞬間に何か新しいものを創造する。したがって、過去がこの存在のうちに想起の状態に置かれていないとすれば、この存在の現在のなかにもその存在の過去を読みとろうと努めても無駄だろう。そういう次第で、本書のなかですでに何度も登場した隠喩を繰り返せば、相似た理由から、過去は物質によって演じられ(joué)、精神によつ

てイメージ化され想像され(imaginé)ねばならないのである。(「物質と記憶」2007年、ちくま学芸文庫、第四章 イメージの境界画定と固定について、317 ページ)

真の記憶は脳の単なる機能ではなくて、記憶を想起するのは精神の作用だということになるのだろう。精神とは何か、精神を持つ生命とは何か、精神はどこに宿るのかということになるだろう。脳を駆動するものは何なのだろうと・・・いろいろと言い換えてみてもまだ答えはないだろうと思う。

- [アンリ・ベルクソン - Wikipedia](#)
- [Henri Bergson - Wikipedia, the free encyclopedia](#)

更新: 2007-02-18T19:21:36+09:00

[2/20/2007 \(Tue.\)](#)

[\[日記\]](#) 言葉と物 IX - 攻略法

「言葉と物」の周辺をうろうろしていたが、ようやく中味に本格的に取り掛かった。原註や訳註を見ていると知らないものが大変多い。「序」からして、「この書物の出生地はボルヘスのあるテキストのなかにある」と宣言されると、予備知識として必要なのではと心が動揺する。それでうろうろしていると、連鎖的にさらにうろうろとすることになるわけだ。

様々な書物が、そして人名が登場する。その歴史的な関係はどうなっているんだろうと思う。少し年表で関係を整理しながら読み進める必要があるそう だ。批判哲学というのはカントを指すのだろう。カントはニュートンの影響を受けたはずだし、実証主義というのはその延長線上にあって、客体の形而上学というのは、はてどのような関係にあるのだろう。主体の形而上学というものもあるのかな。フーコーから見るとベルクソンは形而上学に実証主義を援用したという位置づけなのかな。そんなことに思いを馳せる。

[パット・メセニーを聞きながら](#) (2007/01/13)にある内井惣七著、「空間の謎・時間の謎 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学」はライプニッツの話だが、これはニュートンの絡む話だから、カントの時代でもある。「言葉と物」ではライプニッツは5箇所、82, 88, 175, 266, 267 ページに出てくる。



内田惣七著「空間の謎・時間の謎 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学」
(中公新書、2006年)

12/30/2007 (Sun.)

[千夜千冊] 小林秀雄の哲学

[松岡正剛の千夜千冊 第千二百十二夜 2007年12月27日:『時間と自由』アンリ・ベルクソンネタ。](#)
これを拾ったのは、本日記でも取り上げたベルクソンが題材だし、「[小林秀雄 \(992夜\)](#)の読み方が気にいらなかったせいもある(小林の哲学の70パーセントはベルクソンである。)」とあったからである。「読み方が気にいらなかった」というこの文の意味がよくわからなかったのと、なぜ小林秀雄の哲学がベルクソンなのか、そして992夜は、これから読もうとしている「本居宣長」でもあるからだ。

- 更新日記記事の「ベルクソン」検索結果
 - [\[脳科学\]真の記憶は脳の機能ではない](#) (2007/02/10)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない II](#) (2007/02/12)
 - [\[本\]「意思」の生み出す時間](#) (2007/02/18)
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 VIII - ベルクソン](#) (2007/02/18)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない III - 物質と精神の間](#) (2007/02/18)
 - [\[日記\]言葉と物 IX - 攻略法](#) (2007/02/20)
 - [\[哲学\]言葉と物 XIII - 哲学者と科学者たち](#) (2007/05/05)

思ったよりたくさんの記事がヒットする。

一方、意識には記憶になっていない部分もある。こちらのほうの意識は何なのか。その多くは知覚や行動と結びついているわけだろうが、記憶になっていないということは、現在や未来にかかわっているとみなせる。とくに現在だ。ということは、意識というのはおそらく「時間」にディペンデ(依存)しているということなのである。とくに記憶は過去に結びついている。では、どこからが意識にとっての過去で、どこからが現在で、どこからが未来なのか。

[\(松岡正剛の千夜千冊 第千二百十二夜 2007年12月27日:『時間と自由』アンリ・ベル](#)

クソン)

最近、考えているのは、「記憶は無意識であって身体的なものである」ということで、それは「想起されたことはどこに記憶しているのかは意識できない」からという意味においてである。意識するのは、現在の感覚や意識によって記憶から想起されたものであって、記憶そのものではない。これは単に定義の問題でもあるような気はするが、記憶が貯蔵されている状態にあるものとするれば、想起されたものはコンピュータで言えば、プログラムによってHDDなどのデータストレージからメインメモリに取り出されて、なんらかの処理をされている状態だろうというようなことである。無論、記憶は現在のコンピュータのような記憶の仕方ではなくて、プログラムのようなものも一緒に保持しているはずだろう。他の記憶に関連付ける文脈のような情報を持つものだろうと思われる。自分が記憶を辿る時の仕方を考えると、記憶が意識に取り出される仕方は連想であることは間違いないだろう。

元に戻って、「小林秀雄」と「ベルクソン」で、AND検索すると、小林秀雄は自らの「ベルクソン論」を失敗作として、雑誌連載後、封印されていたらしい。松岡正剛氏が「小林秀雄の読み方が気にいらなかった」のは、その「ベルクソン論」を指すのだろうと思われる。

『(実は「千夜千冊」の一夜にはディスク上の上限があるのです!)』として、長さを気にされたせいか、小林秀雄は最初だけで、最後まで出てこなかった。実際にはディスク上の制限ではなくて、データベース上のフィールドサイズの制限なのだろうと思うが。

更新: 2007-12-31T21:16:39+09:00

1/12/2008 (Sat.)

[小林秀雄] 言葉と物 CII - 感想

夜の想像の闇を通して、低く深く、感情のない打楽器のように、雨が天窓を小刻みに打ち続ける。僕は耳を澄ませて聞き入る。手元には、小林秀雄全作品(新潮社)28巻+別巻4のうち、15モオツァルト、別巻1 感想(上)、別巻2 感想(下)の三冊がある。「モオツァルト」は、OCRで読み込むために良好な印刷状態を期待したのが第一だったが、むしろ1946-1948年当時の「モオツァルト」以外の小林秀雄の思考を知ることができることのほうが重要であった。編年体の全集は作家の思索の跡を辿るのに便利だ。別巻1,2に収められた「感想」(1958-1963年)は、前にも述べた収録が禁じられていたベルグソン論である。

- 更新日記記事の「ベル[グク]ソン」検索結果の一部
 - [\[脳科学\]真の記憶は脳の機能ではない](#) (2007/02/10)
 - [\[茂木健一郎\]新「学問のすすめ」](#) (2007/02/11)
 - [\[立花 隆\]記憶の外部化、神経接続、サイボーグ](#) (2007/02/11)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない II](#) (2007/02/12)
 - [\[本\]「意思」の生み出す時間](#) (2007/02/18)
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 VIII - ベルグソン](#) (2007/02/18)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない III - 物質と精神の間](#) (2007/02/18)
 - [\[日記\]言葉と物 IX - 攻略法](#) (2007/02/20)
 - [\[千夜千冊\]小林秀雄の哲学](#) (2007/12/30)

小林秀雄の「モーツァルト」は自信作であったようだが、「感想」はなぜ失敗作だったのだろうか。5年間も新潮に連載され、未完に終わっている。「感想」の最初には、茂木健一郎氏の「脳と妄想」にも引用される「おっかさんは、今は虫になっている」という話が出てくる。このように自分の体験を書き込むのは小林秀雄の批評の特徴である。「モーツァルト」においては第2節が代表的な部分である。「本居宣長」(昭和52年、1977年)にも最初の部分に自分の体験が書かれている。

今、こうして、自ら浮び上がる思い出を書いているのだが、それ以来、私の考えが熟したかどうか、怪しいものである。やはり、宣長という謎めいた人が、私の心の中にいて、これを廻って、分析しにくい感情が動揺しているようだ。物を書く経験を、いくら重ねてみても、決して物を書く仕事は易しくはならない。私が、ここで試みるのは、相も変わらず、やってみなくては成功するかしないか見当のつき兼ねる企てである。

(「本居宣長」、[1-2]、新潮文庫：8ページ)

この部分は「モーツァルト」の次の部分に照応して思い出させた。

・・・モーツァルトの事を書こうとして、彼に関する自分の一番痛切な経験が、自ら思い出されたに過ぎないのであるが、一体、今、自分は、ト短調シンフォニイを、その頃よりよく理解しているだろうか、という考えは、無意味とは思えないのである。

(「モーツァルト」、[2-1]、新潮文庫：12ページ)

「感想」とは「感じて想う」こと、すなわち、体験(経験かな[^];)である。書かれていることはなんらかの体験についての記述であり、解釈であるだろう。しかし、批評の対象となっている書かれていることのすべてを自ら体験に対比させて批評することは困難であろう。さらにそれを上回ることは難しい。上回っているなら読む必要もないかもしれない。ざっと「感想」を走り読みして感じたのは、個人的体験が書かれているのは最初だけだということ。「モーツァルト」は体験を適度に織り込みながら書かれているかもしれない。「感想」では、言葉の循環運動に捉われたと感じたのかもしれない。

「感想」においては、先に進むにつれて、小林秀雄の哲学とベルグソンの哲学が分離できず溶け合っていくかのようにも思える。どこからどこまでがベルグソンの言ったことで、小林秀雄の付け加えた部分はどの部分かがわかりにくくなっていく。後半は、批評というよりは哲学のスタイルで書かれている。ベルグソンが小林秀雄に乗り移っていく過程のようにも思える。考えが近いものを批評することは難しいのかもしれない。松岡先生が「小林の哲学の70パーセントはベルグソンである」と言われたのは、なるほどそのような意味なのだろうかと思った([小林秀雄の哲学](#))。「モーツァルト」読解レベルの読解をしなければ、それほど明らかではないかもしれないが、「感想」は長すぎる。

「モーツァルト」は11節、全作品上では、57ページに対して、「感想」は56節、438ページである。

・・・もし、そういう所謂哲学上の大問題が、言葉の亡霊に過ぎぬ事が判明したなら、哲学は「経験そのもの」になる筈だ、とベルグソンは考えた。・・・

(「感想」、[2-3]、小林秀雄全作品 別巻2 感想(上)：20ページ)

更新：2008-01-12T12:41:31+09:00

1/12/2008 (Sat.)

[小林秀雄] 言葉と物 CIII - 本居宣長

さて、フーコーから遠く離れたようにも思うが、このまま行き着くところまで行かねばならない。意外と近いところを走っているのかも驚いたり・・・

言語の問題を扱うのに、宣長は、私達に使われる言語という「物」に、外から触れる道を行かず、言語を使いこなす私達の心の動きを、内から掴もうとする。この考え方の結実が「詞の玉緒」という労作だと言える。言葉という道具を使うのは、確かに私達自身ではあるが、私達に与えられた道具には、私達にはどうにもならぬ、私達の力量を超えた道具の「さだまり」というものがあるだろう。言葉という道具は、あんまり身近にあるから、これを「おのがはらの内の物」とし、自在に使いこなしている時には、私達は、道具と合体して、その「さだまり」を意識しないが、実は、この「さだまり」に捕えられ、その内にいるからこそ、私達は、言葉に関し自在なのである。そこに、宣長は、彼の言う「言霊」の働きを見ていた。そういう、言われてみれば、誰も承知しているという「低き所」に見ていたので、特に、「言霊」という高きに登らんとしたのではない。

(「本居宣長」、[24-5]、新潮文庫 本居宣長(上): 290 ページ)

「詞の玉緒」は「ことばのたまのを」と読む。二十四節の最初には『古学の目指すところは、宣長に言わせれば、「古言を得ること」、あたかも「物の味を、みづからなめて、しれるがごと」き親しい関係を、古言との間に結び結ぶことであった』とある。ここには、やはり、経験主義を本質と感ずる小林秀雄がある。

• [本居宣長 - Wikipedia](#) (1730-1801年)

本居宣長が生きたのは、カント(1724-1804年)とほぼ同時代である。西欧で起きたような不連続は日本にもあったのかどうか。それはともかく、前の引用の直前にある段落も引用しておこう。「言葉と物」から「知の考古学」へ、そして文法の問題に向かう予兆を現しているかもしれない。

単語を、ただ集めてみても、並べてみても、文を成すまい。文が文である為には、「その本末を、かなへあはするさだまり」と宣長が言う、もう一つの条件が要る。この条件を現しているものが「てにをは」である。従って、「てにをは」は事物も観念も現すものではない。外物は言うまでもない事だが、一応は対象化して、しかじかの思想感情と考えられる内的なものを指す事は出来ない。とすれば、これを語とは呼びにくい。それでも語には違いないのなら、それは、語の「用ひ方」「いひざま」「いきほい」などと呼んでいいもの、どうしても外物化出来ぬ私達の心の働きを直かに現しているものだ。

(「本居宣長」、[24-4]、新潮文庫 本居宣長(上): 290 ページ)

そして、松岡先生の「本居宣長」の次の部分。

こうして宣長の古事記読解が始まっていく。その方法にはいくつもの脱帽したくなるような工夫があるのだが、その根幹にあったのは、「言」は「事」であるという信念と、断固として漢語を用いないで読み切ってみせるといった信念だけだったかとおもわれる。しかし、それが壮絶なのである。

([松岡正剛の千夜千冊: 第九百九十二夜](#) 【0992】 04年6月18日 小林秀雄『本居宣長』)

1977 新潮社)

『「言」は「事」である』という部分が気になっていたのだが、第24節の最後に照応した。

・・・この「実(マコト)」の、「自然の」「おのづからなる」などといろいろに呼ばれている「事」の世界は、又「言(コト)」の世界でもあったのである。

(「本居宣長」、[24-13]、新潮文庫 本居宣長(上): 296 ページ)

更新: 2008-01-13T09:04:57+09:00

1/14/2008 (Mon.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 CV - 本居宣長とベルグソン

「本居宣長 下」(1992年、新潮文庫、原著:「本居宣長」、新潮社、昭和52年、1977年;「本居宣長補記」、昭和57年、1982年)の最後に、昭和52年に「新潮」誌上で行われた、江藤淳との「『本居宣長』をめぐって」という対談が収められている。この最後の方に「宣長とベルグソンとの本質的類似」の項目が立てられた節(388ページ)がある。

小林・・・

この純粋な知覚経験の上に払われた、無私な、芸術家によって行われる努力を、宣長は神話の世界に見ていた。私はそう思った。『古事記伝』には、ベルグソンが行った哲学の革新を思わせるものがあるのですよ。・・・哲学が芸術家の仕事に深く関係せざるを得ないというところで、『古事記伝』と、ベルグソンの哲学の革新との間には本質的なアナロジーがあるのを、私は悟った。宣長の神代の物語の注解は哲学であって、神話学ではない。神話学というのは---

江藤 分析と類推ですからね。

小林 私には、あまりおもしろいものではない。

もっとおもしろいことがこの前に書かれている。

・・・常識にとっては、対象は対象自体で存在し、而も私達に見えるがままの生き生きした姿を自身備えている。これは「image(イマージュ)」だが、それ自体で存在するイマージュだとベルグソンは言うのです。・・・

・・・

『古事記伝』になると、訳はもっと正確になります。性質情状と書いて、「アルカタチ」とかなを振ってある。「物(ゝ)」に「性質情状(アルカタチ)です。これが「イマージュ」の正訳です。・・・宣長が見た神話の世界も、まさしくそういう「かたち」の知覚の、今日の人々には思いも及ばぬほど深化された体験だったのだ。

ベルグソンのイマージュや本居宣長の物の性質情状は、現代の言葉で言えば、「クオリア」に相当するのではと思われる。実際にはもっと広い意味合いで使われていると思われるが、小林秀雄の説明からは「クオリア」を含んでいるように思える。現実から受ける生き生きとした質感である。これか

らのメディアは クオリアを人間に感じさせるような表現力を持たねばならないのかもしれない。言葉からイメージや物の性質情状が得られるのかというと、なかなか微妙な問題もありそうな気がするが、本居宣長を読んでいて、「大分前に、ははア、これだと思ったことがある」という小林秀雄は、言葉の中にクオリアを見たと言える のかもしれない。それは自分自身の中に見たのではあるが。

小林秀雄が本居宣長の連載を始めたのは、昭和41年(1965年)4月と考えられるから、「感想」を断念してから3年の後のことである。小林は、この節の冒頭の発言で、「・・・私は若いころから、ベルグソンの影響を大変受けて来た。大体言葉というものの問題に初めて目を開かれたのもベルグソンなので。それから後、いろいろな言語に関する本は読みましたけれども、最初はベルグソンだったのです」と述べており、「物質と記憶」に言及する。ベルグソンの言語論という見方で「感想」と「物質と記憶」を読んでみる必要があるかもしれない。小林が、フーコーやチョムスキーを「本居宣長」執筆中(1965-1977年)に読んだかどうかは気になるが、時期的には、和訳が出たのは「知の考古学」(1969年)が1970年、「言葉と物」(1966年)は1974年、「デカルト派言語学」(1966年)は1976年である。もっとも小林秀雄に和訳がどれほど必要かは疑問だが・・・

- 更新日記記事の「物質と記憶」検索結果の一部
 - [\[脳科学\]真の記憶は脳の機能ではない](#) (2007/02/10)
 - [\[茂木健一郎\]新「学問のすすめ」](#) (2007/02/11)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない II](#) (2007/02/12)
 - [\[本\]「意思」の生み出す時間](#) (2007/02/18)
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 VIII - ベルグソン](#) (2007/02/18)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない III - 物質と精神の間](#) (2007/02/18)

更新: 2008-01-14T23:01:58+09:00

2/9/2008 (Sat.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 CVI - 本居宣長 II

「言葉と物」シリーズから、「モーツァルト」読解シリーズが派生し、「小林秀雄」読解シリーズへと展開しつつある。遺作「正宗白鳥の作について」(1981-1983)はあるが、「感想」(1958-1963)と「本居宣長」(1966-1977;本居宣長補記は1982年刊行)が小林秀雄の思索の到達点とすると、しばらく、ここらへんに逍遙することもよいだろう。

小林秀雄にかなり深入りしている人の詳細な年表を見つけた。以前も見つけていたかもしれないが(;))

- [小林秀雄とその時代](#)

「本居宣長」は、ベルグソンとセットでシリーズ化しそうなので、過去の記事をリストアップしておこう。

- 更新日記記事の「本居宣長」検索結果

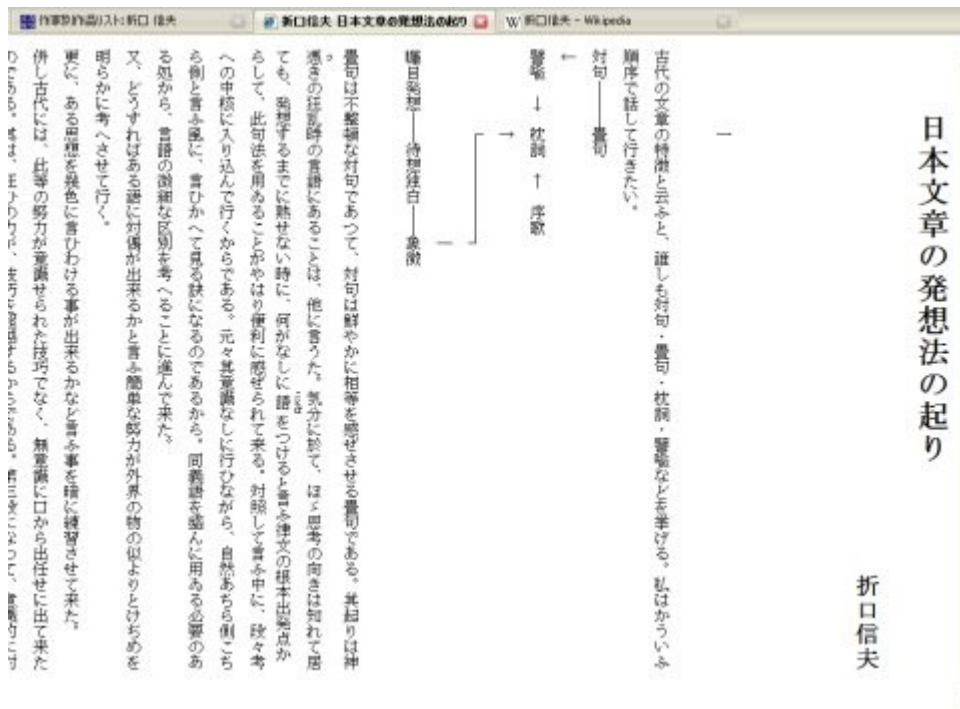
- [\[柄谷行人\]言葉と物 XXXI - 日本精神分析](#) (2007/06/30)
- [\[本\]言葉と物 LXV - 反文学論](#) (2007/09/24)
- [\[千夜千冊\]小林秀雄の哲学](#) (2007/12/30)
- [\[批評\]言葉と物 CI - 「モーツァルト」読解 III](#) (2008/01/05)
- [\[小林秀雄\]言葉と物 CII - 感想](#) (2008/01/12)
- [\[小林秀雄\]言葉と物 CIII - 本居宣長](#) (2008/01/12)
- [\[小林秀雄\]言葉と物 CIV - 「モーツァルト」読解 IV](#) (2008/01/14)
- [\[小林秀雄\]言葉と物 CV - 本居宣長とベルグソン](#) (2008/01/14)

「本居宣長」は、戦時中に「古事記」を読んでみようとして、本居宣長の「古事記伝」で読んだという話からはじまり、折口信夫から「小林さん、本居さんはね、やはり源氏ですよ、では、さようなら」と言われたという思い出が語られる。折口信夫という名前は知っているが、どのような経緯で知ったのか、もう記憶はかすれてしまっていて復元できないし、読んだ本もない。源氏は「源氏物語」のことだろうけど、戦後世代のわれらには、すべては遠く歴史のかたに埋もれている。

少しは調べておこうか。例によって、千夜千冊をひもとく。[松岡正剛の千夜千冊『死者の書』折口信夫](#)がある。Amazonで調べて、「古代研究 I --- 祭りの発生」、「死者の書・身毒丸」、「言語情調論」を取り寄せてみる。しかし、これ以上を追いかけても深みにはまりそうだから、積読の位置を与えることにする。検索すると、青空文庫の作家別作品リストがWikipediaの次にリストされる。そこからウラ・アオゾラブンコなるものがあることも知った。

- [折口信夫 - Wikipedia](#)
- [青空文庫: 作家別作品リスト: 折口 信夫](#)
- [折口信夫 - ウラ・アオゾラブンコ](#)

青空文庫に公開されている作品から「[日本文章の発想法の起り](#)」を縦読みブラウザで読んでみた。



日本文章の発想法の起り

- [\[jper1\] 青空文庫のXHTMLの縦書き表示](#)

(2006/06/11)

- [\[jper1\] 「青空文庫」縦読みビューアー](#) (2006/06/11)
- [\[jper1\] 「青空文庫」縦読みビューアーちょっと改造](#) (2006/06/11)
- [\[jper1\] 「青空文庫」縦読みビューアー II](#) (2007/04/15)

文章の起源を考えるという視点というか発想はめずらしいなあと思った。やはりもう少し深入りするかもしれない。源氏物語関連では、[反省の文学源氏物語](#)がある。

本居宣長の最初に「古事記」と宣長の著書である「古事記伝」が出てくると、知っていなければ論理的、必然的に「古事記」あるいは「古事記伝」とはどのようなものかを知らなくてはならないことになる。記紀に関する記憶としては、スサノオノミコトやオオクニヌシノミコトについて、それぞれ、ヤマタノオロチ 退治やイナバノシロウサギの御伽話があるぐらいであり、大昔に「日本誕生」(東宝、1959)の映画のカラーポスターや岩戸隠れで朝潮太郎が出演したのを憶えているぐらいである。正確に古事記とは何かを知らない。ましてや、古事記伝については知らない。

- [古事記 - Wikipedia](#)
- [日本書紀 - Wikipedia](#)
- [日本誕生 - Wikipedia](#)

実は「古事記」と「古事記伝」そのものに当たるのに先走って、古事記がどのようなもので、どのように読まれているのか、梅原猛著「神々の流竄(るざん)」(集英社文庫、1985;初出:すばる、1970)に手を染めてしまっている。いよいよ混沌の極みだが、本居宣長は日本の古典の研究者として、もっとも偉大な学者として紹介されており、文献学者にふさわしく「古事記」、「日本書紀」に書かれていることはすべて事実として受け取るのが、本居宣長の方法としている。事実として受け取るというよりは、書かれている通りに受け取るということかもしれないが、今ここで、神々の流竄に深入りすることは、本居宣長から離れることになるので、この程度に留めておこう。上山春平著「神々の体系」(中公新書、1972)にも同様の記載があり、本居宣長の解釈をそのまま受け入れることはできないということらしい。神々の流竄の解説は上山春平氏が書かれている。

- [梅原猛 - Wikipedia](#)
- [上山春平 - Wikipedia](#)
- [松岡正剛の千夜千冊『埋もれた巨像』 上山春平](#)

更新: 2008-02-10T13:23:46+09:00

2/11/2008 (Mon.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 CVIII - 本居宣長 一

現代人は日本の歴史を知らなさ過ぎる。戦後、閉ざされた歴史をもう一度開いてみよう。本居宣長は小林秀雄の現代日本語の導きがあるので、最適な道かもしれない。

例によって、固有名詞の抽出から始めよう。

1. 本居宣長 → [本居宣長 - Wikipedia](#)
2. 古事記 → [古事記 - Wikipedia](#)
3. 古事記伝 → [古事記伝 - Wikipedia](#)
4. 折口信夫 → [折口信夫 - Wikipedia](#)
5. 大森
6. 橘守部 → [橘守部 - Wikipedia](#)

Wikipediaには、橘守部は伝説と史実を区分する必要性を説いて、本居宣長を批判したとある。これで小林秀雄の宣長の弁護の話につながる。そんなことは本人は百も承知だというわけだ。

7. 源氏 → [源氏物語 - Wikipedia](#)
8. 東京
9. 鎌倉
10. 松坂
11. 大船
12. 大阪
13. 伊勢松坂
14. 蒲生氏郷 → [蒲生氏郷 - Wikipedia](#)
15. 松坂城址
16. 鈴屋遺跡(すずのやいせき) → [本居宣長旧宅](#)
17. 遺言状(寛政十二年申七月、春庭、春村宛)
18. 樹敬寺
19. 妙楽寺
20. 名古屋
21. 松阪駅
22. 伊勢海
23. 三河尾張
24. 本居宣長之奥墓
25. 本居宣長之奥津紀
26. 春庭
27. 春村
28. 小西太郎兵衛
29. 薬種商小西家
30. 岩崎栄令
31. 浄土宗
32. 栄貞詠草
33. 妻、勝
34. 村岡典嗣(むらおかつねつぐ)
 1. [国立国会図書館：近代デジタルライブラリー：本居宣長 / 村岡典嗣著，警醒社書店，1911](#)
 2. [青空文庫：作家別作品リスト：村岡 典嗣](#) (残念ながら、今のところ収録作品はない)
35. 松坂奉行所
36. 申披六ヶ敷筋

37. 寛政二年秋
38. 宣長の自画自賛の自画像
39. 「しき嶋の やまごゝろを 人とはゞ 朝日にゝほふ 山ざくら花」
40. 四十四歳の自画像
41. 「めづらしき こまもろこしの 花よりも あかぬ色香は 桜なりけり」
42. 宝暦九年正月(三十歳)
43. 「わするなよ わがおいらくの 春迄も わかぎの桜 うへし契を」
44. 寛政十二年の夏(七十一歳)
45. 吉野山
46. 吉野百首詠

吉野百首詠を詠んだ翌年、遺言書を認めたあと、桜の歌を詠んだ歌集「まくらの山」(?)の後記が引用されている(小林秀雄著「本居宣長 上」、新潮文庫、17-19 ページ)が、最初の文の長さには日本的な文章の流れを感じてしまう。「あなものぐるおし」の掛かる言葉に言及した後、桜の歌が 三首示されて一節は終了する。

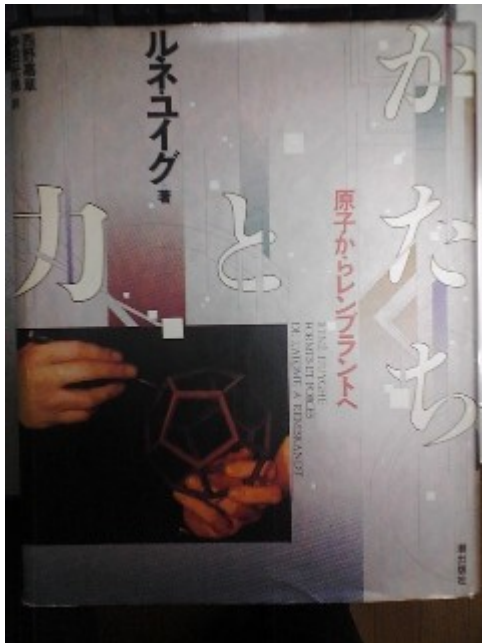
11/15/2008 (Sat.)

[\[小林秀雄\]](#) 没後四半世紀特集『小林秀雄の「響き」』

水曜日から快晴が続いていたが、今日は変わり目かもしれない。水曜日の宮島は色彩も鮮やかに遮るもののない空気の中に浮かんでいた。昨日の朝、白く 薄い透明な月の円盤が西の空に張り付き、帰宅時には東にたなびく雲の間に赤く浮び上がっていた。大気には少し水蒸気が多く含まれ、昼間の宮島は鮮やかさを 失っていた。今日は、朝早く超音波エコーの内臓診断と肝臓ガンマーカの血液採取を終え、昼からはお見舞いに行く二人を車で送ったあと、徒歩で南区図書館 に向かう。「かたちと力」の返却日だ。ろくに読んでいないのに・・・図版と目次だけ、もう一度眺める。11/01/2008: [デバイス] [chumby](#) の記事経由。



宮島遠望、11月12日



ルネ・ユイグ著「かたちと力」

南区図書館で返却口に本を置くと、「新潮」の12月号を雑誌棚から取り出す。おじいさんとおばあさんが間を一つ空けて並んで本を読んでいた。僕はおじいさんの向かいに坐って読み始めた。おばあさんは本の上でうとうととしている。そのうち入れ替えでおじいさんが扉をかきはじめる。おじいさんは土曜なのになぜかワイシャツにネクタイを締めている。仕事帰りなのかな。そのうち気が付いて、少し恥ずかしそうに立ち上がって、細身の身体に上着を纏って席を離れた。

「新潮」12月号には、没後四半世紀特集『小林秀雄の「響き」』特別付録CD(名講演選)対談茂木健一郎+白洲信哉がある。しばらく東浩紀氏の「ファントム、クォンタム(第4回)」を眺め、榊氏の金井美恵子についての文を少し懐かしい思いで読み、茂木、白洲氏の特別対談「批評の肉体性を聴く」を読んだ。雑誌にCD付録なんていいねえと思った。もちろん小林秀雄の講演集の宣伝も兼ねているのだろうけど。僕は、フォーサイトの読者として、なるほど新潮社だねえと思う。「新潮」のキャッチフレーズには「今年104年目の文芸誌」とあるのだが、昔はあまり手に取ったことはなかった。最近読めそうで目に留まる文芸誌はこれぐらいしかない?!

茂木氏の各所での話から小林秀雄の講演は聞いてみたいと思っていたので、「これはいい機会だなあ。12月号ならまだ本屋にあるだろう。」とそそくさと図書館を出て、来た道とは逆の方向に向かう。夢タウンの紀伊国屋書店経由で帰ることに。予想通り、まだ数冊残っていた。紀伊国屋書店を出ると、空には前線を示す雲の群れで一杯だった。夕方から雨が降ってきた。

未発表音源としては、27分27秒の「匂玉について」(昭和42年1月7日)があり、他の五つの講演の抜粋を合わせて73分31秒。これで、本誌込みで1,100円はお買い得だろう。講演のうち、三つはベルグソンに関するもので、小林秀雄のベルグソン論である「感想」は「新潮」に連載されていたのである。

「感想」の終わりごろ、49-56節には、科学として物理学が本格的に登場する。「感想」が未完に終

わったように、哲学と科学の統合はまだ終わっていない。

更新: 2008-11-15T21:40:38+09:00

Afterword

さて、どこから食いつくのか。方法論は・・・

2008-11-15 jscripiter